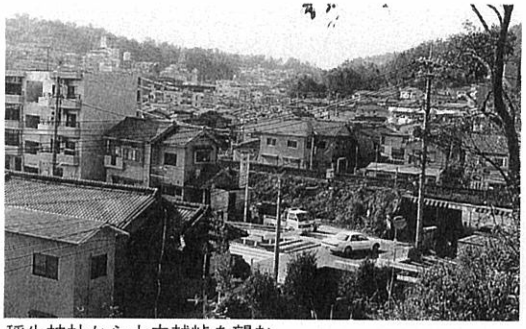


稲生神社から大内越峠を望む

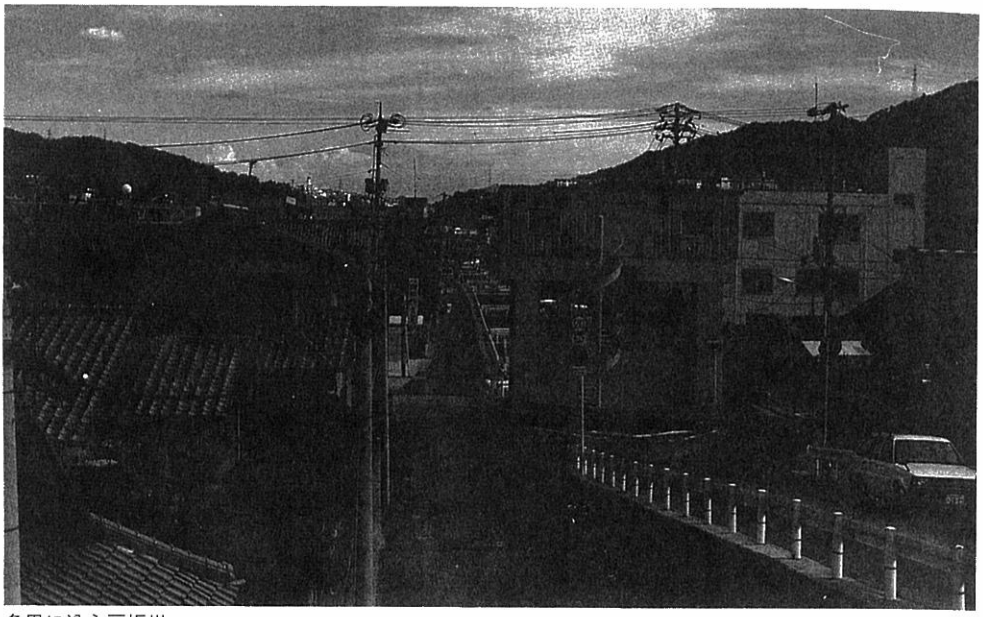
ＪＲの車両基地で遮断された旧山陽道

中山峠に向う旧山陽道

4　府中から戸坂まで

安芸駅を発った官道は鶴江橋あたりで温品川を渡る。支流の中山川に沿って少しばかり進み、曲流部を近道して、中山小学校横で再び同川と交わる。この地点は中山川が直角に折れるところで、その方向は府中平野に分布する条里の方向、いわゆる安芸系の方向に一致している。こうしたことを考慮すると、中山川の流路は条里施行の際、人工的に固定したものと思われる。それゆえに、その後天井川化がすすみ、やがて温品村・中山村の足かせとなった間所、鳥落一帯の悪水問題を誘発させるのである。当時、府中平野は浅海もしくは干潟を形成しており、官道はその浜堤を利用した最短コースをとったのであろう。この道はかつては府中と祇園を結ぶ幹線であったが、中山川左岸堤防が自動車道として利用されるようになって廃れていった。つい最近まで農道として地元住民に利用されていたが、現在その一部がＪＲの車両基地に取り込まれてしまい、両側に残った道は分断される結果となった。『芸藩通志』の絵図には、この辺りに三日市の地名が載る。また、南に向かって上縄・中縄・下縄・古新開・十四割といった地名が続き、府中平野の開発の過程がうかがわれる。石風呂畷・桶の口畷といった古い地名も残っている。中世まで、この地は吉田を含む内陸諸盆地から、三篠川筋を利用して瀬戸内海へ至る玄関に相当する交通の要であった。西への大内越峠（おおちごだお）も整備された。しかし、その後の干拓地の造成による旧山陽道の南下や、太田川デルタの本格的な開発さらに太田川舟運の発展等によって、この地の特性は太田川河口に完全に吸収されてしまうのである。

さて、官道はここから中山川左岸を中山峠に向かう。稲生神社以北は芸備線の鉄道敷となって、道の痕跡はほとんど残っていない。ただ、一か所、線路の東側山脚部に、地元住民が古い道だという一メートル余りの狭い道が、民家の築地に沿って残っている。これが、古いルートを踏襲しているものと思われる。



条里に沿う戸坂川

中山峠からは太田川平野が一望できる。そこには『和名類聚抄』に載る幡良（東原付近）・河内（川内一帯）・田門（中須・中筋あたり）といった、当時太田川左岸に位置した安芸郡の各郷が、また、正面はるかには佐伯郡の緑井郷・養我郷（八木一帯）が、目を少しばかり左に転ずれば、河口付近には同郡の伊福郷（祇園一帯）・桑原郷（長束・山本あたり）が見渡せた。官道はこの平野を斜めに横断して、対峙する安川の谷口へと向かうのである。

峠を下ると戸坂の平野である。ここは太田川の土砂堆積からはずれた後背湿地に相当し、長らく一面の水田であった。一帯には安芸系の条里が分布し、これは対岸の東原さらには中筋あたりまで続いている。川内・中筋・東野・東原といった旧村は、現在は太田川と古川に挟まれて輪中を形成しているが、当時の太田川はこの輪中のほぼ中央部を横切って流れ、古川を流路としていた。そのため、安芸系の条里が現太田川を越えて分布しているのである。官道は、古市の東側あたりの太田川渡河地点まで、この条里に沿って建設されたものと思われる。このルートを引き継いでいるのが戸坂川左岸の道である。この道は現太田川を隔てて東原に直線的に続いており、かつての両道を結んでつり橋の安芸大橋が架っていた。

（天満　富雄）